

第3回東北アジア地域協力発展国際フォーラム

ERINA 調査研究部研究主任 三村光弘

2010年6月14日～16日、中国・ハルビン市で第3回東北アジア地域協力発展国際フォーラムが開かれた。この会議は、6月15日～19日に開催されたハルビン国際経済貿易商談会（ハルビン商談会）に時期を合わせ、黒龍江省人民政府と中国社会科学院が主催し、黒龍江省社会科学院がオーガナイズしている国際会議である。第3回となった今回は、北東アジア各国と中国国内から100人以上の講演者、発表者が参加し、参加者は延べ1,000人を超えた。

中国東北地方の北東アジアとの付き合い方は、各省の地理的位置により微妙に異なる。黒龍江省が直接国境を接しているのはロシアだけ（吉林省はロシアと北朝鮮、遼寧省は北朝鮮だけ、内モンゴル自治区はロシアとモンゴル）で、国境貿易は主にロシアと行われているため、ロシアとのつながり、特にロシアの地方政府との関係が緊密である。

この会議もその例に漏れず、会議のそこかしこで、ロシアの存在を感じるようになった。この会議でも外国からの代表リストはロシア、日本、韓国、モンゴル、米国の順番であった。また、全体会での外国総領事の挨拶も、ロシア、日本、韓国、モンゴルの順番であった。意外に健闘していたのは日本で、参加者の人数も多く、顔ぶれも多様であった。これはおそらく、黒龍江省社会科学院と日本の研究機関の交流が盛んであることが要因であろう。

14日は全日、各国の主要な代表が講演を行う全体会¹であった。全体会は、一昔前の中国の学術討論会、あるいは政府が行う会議風で、代表が一方的に話し、討論は行われないスタイルであった²。来賓の発言などはこのようなスタイルでもいいのかもしいが、政府の代表や学者の発表に関しては、パネルディスカッション方式を取り入れて、質疑応答を行うような方式にする方が、「豪華キャスト」をより活かし、黒龍江省が現在行い、今後行おうとしている北東アジアとの経済交流について、より深い理解がもたらされるのではないかと感じた。

全体会の議論を聞いていると、黒龍江省における北東アジア経済交流は、圧倒的にロシアとのそれが身近であり、国境を接している地方政府同士の連携がかなり進んでいる様子が見て取れた。

翌15日の午前中は、中ロ、中日、中韓蒙の3つのグルー

写真1 全体会の様子



写真2 中日分科会の様子



写真3 ハルビン商談会の様子



プに分かれて分科会となった。中日分科会のメンバーはほとんどが中国語と日本語両方を解したので、日本側メンバーに配慮して、日本語での発表となった。短い時間（発

¹ 会議日程は中国語だが、黒龍江省社会科学院のホームページに掲載されているので (http://www.hlass.com/public/AA/index.jsp?TemplateName=AA_03lt_hyyc.htm) 参照していただきたい。

² 代表の名簿も、中国語ではあるが黒龍江省社会科学院のホームページ (http://www.hlass.com/public/AA/index.jsp?TemplateName=AA_03lt_dbmc.htm) で公開されている。

表6分、討論4分)の中で発表と討論が行われ、時間は不足気味ではあったが活発で専門的な議論が展開された。

15日の午後は、開催中のハルビン商談会の見学となった。今年で21回目となるハルビン商談会は、国内外から数多くの出展者が集まり、展示即売を行っていた日本からもさまざまな企業やJETRO大連事務所や新潟県、市、山形県、鳥取県などの政府機構、自治体からの出展があった。

前回の商談会と比較すると今年は、金融のブースが多くなっており、近年東北でも増加しつつあるマイクロクレジットを提供する業者のブースが数多く並んでいた。また、中口間の人的、物的交流の増加に伴い、ロシアルール建ての決済を扱う銀行の展示が増えていた。

写真4 マイクロクレジットを提供する会社の展示

